労協連だより

古村伸宏（日本労協連・専務理事）

ICAバルベリーニ会長を迎えての法制化集中期間は、たくさんの成果を残した。とりわけ、5年ぶりにWNJ（ワーカーズコレクティブ・ネットワーク・ジャパン）と共同連が同席し行われた法制化を求める集いは、中央労福協の笹森会長、京都大学名誉教授の池上惇先生、そしてバルベリーニ会長という顔ぶれが一堂に会した。協同労働の法制化を求める機運が、時を経て大きな流れに合流する機運が一気に高まった。この流れが連帯の力となって、さらに社会的に協同労働を伝え広げ、さらに大きな連帯のうねりを生み出す源泉としていかねばならない。

第27回定期全国総会の基調も、協同労働の大連帯を名実共に築き上げていくことが大命題となる。協同労働への期待や信頼、そして実感の輪を広げ、法制化のネットワークを格段に広げるために、とくにWNJや共同連との連携を強化していきたい。

総会では、あわせてこの1年の決定的な前進を共有することと、勝負となるこの1年の実践課題を明らかにして確認し合うことになる。3年ぶりの東京開催の総会となるが、加盟組織の総会の水準を高める努力を尽くし、結集力を示す全国総会としたい。

協同集会の準備も、徐々に熱を帯びてきた。この間の最大の成果は、実行委員会の広がりの条件が格段に高まったということだ。複数の代表委員制となった実行委員会。その顔ぶれは、労協連合会の菅野理事長、協同総研の中川理事長の他、地元の神戸労協の森友代表理事、兵庫県社協の辻会長、神戸大学名誉教授の野尻先生である。森友代表理事は、元神戸市職労の委員長であり、労働組合への影響力が絶大である。また県社協が実行委員会に参加し、会長が代表委員に名を連ねるというのは協同集会史上はじめてである。そして野尻先生はコープこうべの理事長もされており、県内での影響力や認知度は絶大である。神野直彦先生の基調講演が早々に内定したのに続き、新しい協同集会の歴史の幕開けを予感させる流れだ。この流れを本物のしていくための、地元兵庫県内の労協・高齢協メンバーによる行動もはじまった。

今年も桜を満喫する間もなく、春の訪れから総会の季節へと、流れは加速している。今年の春は、出会いと新しいスタートの春の匂いが漂う。43回目の春は、灼熱の夏と実りの秋をもたらす、大事な時のように思う。総会へ、思いを込めて新しいチャレンジを。